

領域「環境」の指導法についての一考察

—身近な自然との関わりを通して、好奇心・探究心を育む—

小山 容子

要約

本研究は、自然と関わって遊ぶ幼児の姿を自然観察法によって収集した記録を分析し、幼児の学びの内容と教師の指導の在り方を探ることを目的とした。結果、幼児は知的好奇心を出発とした直接体験の中で、疑問や発見の喜びを教師や友達に伝えたり、友達の考えを取り込んだりしながら更に探求し、思考を深めていくことが認められた。また、教師には共感・動機付け等の援助と共に、見通しをもった指導が求められる。そこで、記録から抽出した事項を年間計画にまとめ、自然との出会いや関わりをどのようにつくったらよいかを示した。

I. 研究の目的

現行の幼稚園教育要領施行から10年が経ち、平成30年から新たな幼稚園教育要領が施行される。新幼稚園教育要領は、近年の子供の育ちをめぐる環境の変化等を踏まえ、教育内容を改善・充実したものである。

内容的には、総則の第1において、幼稚園教育の基本は、幼児期の特性を踏まえ「環境を通して行う」と記されており、これまでの教育の基本が引き継がれている。続く第2は、改訂により新設された部分で、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明示された。第2の新設は、幼少接続の更なる推進への期待であり、幼稚園での学びが小学校での学びにつながることへの期待とも言える。

この資質・能力について無藤隆(2017)は、知的な力と情意的な力で構成され、知的な力は個別の事柄に気付くことと、その成り立ちについて考えること、情意的な力は意欲と更に意志を含める、簡単に言えば気付く力であり、考え工夫する力であり、意欲を抱き意志をもって取り組む力であると説明している。そして、保育内容の根幹としての「力」として概念化し、3つの柱として整理したものであり、幼児教育を相対

的に捉える枠組みであると述べている。新幼稚園教育要領の記述では、3つの柱の1つは、豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」2つめは、気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力の基礎」3つめは、心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」と記述されている。

そして「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」（文部科学省、2016）によると、幼児教育においては、幼児期の特性から、この時期に育みたい資質・能力は、小学校以降のような、いわゆる教科指導で育むのではなく、幼児の自発的な活動である遊びや生活の中で、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、できるようになったことなどを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育むことが重要であると記されている。

近年のグローバル化や情報化の進展、AIの飛躍的な進化は、私たちの生活に多様性をもたらし、日常生活を質的にも変化させつつある。子供をとりまく社会が加速度的に変化する中、子供たちには感性を豊かに働かせながら試行錯誤し、新たな価値を生み出しながら、よりよい未来を創り出していくために必要な資質・能力を育むことが必要である。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中でも、幼児が身近な事象に積極的に関わりながら思考力の芽生えを育てていくことや、自然に触れて感動したり身近な動植物に心を動かされる体験の中で、自然への愛情や畏敬の念、命あるものをいたわり、大切にしたい気持ちを育むようにすることが求められている。領域「環境」から捉えると、①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。②身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それらを生活に取り入れようとする。③身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする心情、意欲、態度を育むこととなる。

これらのことを踏まえて、本研究では、自然環境に焦点をあて、幼児が自然と関わる中で見せる姿から、幼児の学びを考察した。その際、関わりの出発点は幼児の知的な好奇心であると考え、好奇心から学びを深めていく過程を分析し、これを支える教師の指導の在り方を明らかにすることを研究の目的とした。また、自然は時期を適切に捉えないと成長、発達を促す経験や活動にはなり得ないことから、見通しをもった指導を可能とするため、年間計画を作成し、自然との出会いや関わるの場をどのようにつくったらよいかを明らかにした。

尚、保育用語辞典によると「好奇心とは、未知のものや新奇なものに興味・関心を持ち、そうしたものに対する接近や探索行動を引き起こす欲求のことである。また、好奇心のなかでもとくに、知的な情報の獲得や探求に向けられた好奇心は、「知的好奇心」と呼ばれる。」とある。また、幼児学用語集によると2、3歳頃の質問期にみら

れる「これ、な～に?」「どうして?」などの質問行動は、知的好奇心に基づいた行動といえるとある。よって本研究において知的好奇心とは「知的な情報の獲得や探求に向けられた好奇心」と意味付けた。

Ⅱ. 研究内容・方法

- (1) 自然観察法を用いて、身近な自然との関わりの中で、幼児が事物と出会い、新鮮な驚きや気付き、感動の場面を記録する。収集した記録から状況を分析しながら幼児の学びを読み取り、教師の指導の在り方を考察する。
- (2) 幼児の発達に即し、系統的でストーリー性をもった指導が展開できるよう、自然環境から身近な飼育、栽培を中心に抽出し、直接的、具体的な体験の指導計画を作成する。

表1 指導計画の構成内容

期	学年別に幼児の姿が変容する時期を5期に区切る
期のねらい	幼児にこの時期育てたい総合的な指導のねらい
自然に関わる内容	この時期にできる幼児に望ましい経験内容
動物との関わり	見る、触れる、遊ぶなど、直接経験できるもの
植物との関わり	観る、栽培するなど、時期に応じて経験できるもの
その他(身近な環境)	自然現象や事象など、幼児に関心をもたせたい事柄
遠足	自然に触れるためにより望ましい地域や場所(園外)

Ⅲ. 結果と考察

●事例① 3歳児 オジギソウとの関わり

ある朝、教師は「おはようって言うとおはようっておじぎするのよ」と、オジギソウの葉を指で触りながらA児とB児に話した。オジギソウの葉は、ゆっくりと垂れ下がり下を向く。

A児は、教師の様子を見ながら指で触り、暫くの間毎朝「おはよう」と言って触るようになった。そして数日後、「先生、ほかのお花は おはようしてもおじぎしないのに どうしてこのお花は おじぎするのかなあ?」「ふーっとふいても おじぎするよ」と、教師に話した。

<行動の分析>

- 教師と共感する喜び
- 花との対話・植物への愛着
- 教師の心を感じとる心の豊かさ
- 教師との安定した関係
- 非生物との関わりりの豊かさ
- 繰り返しからの発見
- 優しさ、丁寧さなど、手をかけられた体験、表現が言葉や動きになって出てくる

別の日、教師の様子を傍観していたB児は、友達を呼び集めて、教師のしていたとおり指で触りながら「こんにちはってってるよ」「みてみて」と、言いながら繰り返し葉に触っている。

○好奇心・疑問・試す

○友達との共感

○情報を伝える

(教師の関わり)

教師がオジギソウに触れる姿は、2人の知的好奇心を刺激し、主体的に関わる中で気付いたり、発見したりする態度を引き出している。A児のオジギソウに触れる仕草は教師の仕草の模倣であり、対象への興味や関心を広げる教師の言動の影響は大きいと言える。また、教師が幼児と同じ目線に立ち、発見や気付きを承認、受容することは、幼児をより深い探索に向かわせる。なにより、教師自身が自然に対して感性豊かな人であることが大切である。

(考察)

A児は、教師が見せたオジギソウの葉に不思議さを感じ、なぜ葉がおじぎするのだろうと、知的好奇心を揺さぶられ、自分が触れてもおじぎするだろうかを試している。そして、継続した関わりの中で新たな疑問をもち、他の植物と比較したり、別の方法で試しながら、強い空気が触れても葉が垂れ下がることを発見した。発見の喜びは教師が共感してくれたことで、更に嬉しいことになっている。

A児は毎日オジギソウと対話しながら対象への親しみを深めていくが、葉に触れる仕草や言葉には優しさや丁寧さがあり、A児自身が周囲の大人から手を掛けられて育ったことが感じられる。その蓄積が、植物に関わる態度に表われていると考えられる。

一方、すぐには葉に触れなかったB児だが、その後の行動から、当初から対象に知的好奇心を抱いていたと読み取れ、行動のタイミングは幼児により異なると言える。

●事例② 4歳児 蝶との関わり

昼食時、蝶が保育室に入って来た。

A児は、じっと見つめ、「ちょうちょはメロンが好きなのかな？」とつぶやき、「これぶらさげて」と食べかけのメロンを教師に持って来る。

教師はメロンを糸に縛って壁から吊り下げたが、蝶は、メロンとは別の方向に飛んでいく。蝶の動きを目で追いつけるA児は、「ちょうちょ、止まらないね、どうしてだろう、わからないんだ」と言う。

<行動の分析>

○蝶に対する知的好奇心

○共感する

○観察し確かめる

○疑問をもち、思考する

B児は「線を書けばいい、こっちにあるよつて」と、矢印を書いて壁に貼り、蝶の誘導を試みた。しかし蝶は飛んで来ない。

C児は「花を書けばいい、花が好きなんだ」と、いろいろな花を描いたり作ったりして壁に貼り付け、メロンへの道筋を示した。しかし、一向にメロンに近付こうとしない蝶を見ながらA児は「止まらないね 本物の花が好きなんだ」とつぶやく。

○考えを伝える・工夫する

○確かめる

○ひらめきを友達に伝える・挑戦する

○確認する

○友達の考えに触れ、新たな考えを導き出す

(教師の関わり)

教師は、幼児の蝶への知的好奇心を捉え、幼児と蝶との偶然の出会いを生かす関わりをしている。蝶に心を動かし、イメージを膨らませながらメロンと結び付けようと思考錯誤する幼児。対象への関わりの中で友達の考えに触れ、自分の中に取り込み、新たな考えを導き出そうとしている。幼児の蝶に対する捉えは擬人的だが、教師はその子らしい発想を実現できるように援助し、疑問に思う気持ち等に共感している。このように対象に対して心を動かし、自分なりに考え、関わる中で、幼児の探求心が膨らみ、やがて蝶の生態に気付くものと思われる。

(考察)

A児は突然現れた蝶に関心をもち、自分が好きなメロンを食べさせようと実行した。しかし予想に反して蝶はメロンに止まらず、なぜだろうと疑問をもつ。B児は、メロンの場所が分からないのだと考え、矢印で道順を示す工夫をし、試した。C児は、蝶が花に止まる様子を思い出し、自分なりに考えた方法で挑戦した。A児は、考え、実行し、上手いかわず疑問をもち、友達の考えなどに触れる中で蝶は本物の花が好きなのだと新たな考えを展開している。

3人の幼児が、友達のなかでも自分の考えを自由に表現できるのは、何を言っても受け止めてもらえるという教師との信頼関係や友達への親しさが基盤にあるからだと考えられる。

●事例③ 4歳児 アゲハの幼虫の羽化

学級で育てていたアゲハの幼虫が羽化しそうな朝、教師は、「ちょうちよが生まれそうだから見て見よう」と子供たちに声を掛け、保育室の中央にテーブルを出してその上にアゲハ蝶のさなぎが入った飼育ケースを置いた。

幼児たちは教師の言葉に誘われ、テーブルを囲み、さなぎを覗き込んだ。そして小さな変化が始

<行動の分析>

○実物を見て確かめる

まると「動いた」「出てきた」「羽がしわしわだね」と口々に言葉を発する。

A 児は、図鑑を持って来て目の前の出来事と比べ、「おんなじだ！」と言う。

B 児は、「そんなの 見なくても もう知っているよ あたりまえだよ」とそっけない言葉を返し、保育室を出て行こうとした。

そこで教師は、「B ちゃん、いいじゃない、そんなこと言わないで一緒に見ようよ」と声を掛けた。B 児は教師の誘いに応じ、仕方ないなあという表情を浮かべて飼育ケースを覗いた。そして、さなぎから出てきたばかりの蝶を見ると、「あっ！濡れている、白い線がある！」と驚きの表情を浮かべる。そしてしばらくの時間、教師と幼児たちは蝶を見守り続けている。ふと A 児が「なかなか 飛ばないね」と心配そうに言う。教師が「まだ 羽が乾かないからね 見ててごらん」と教えると、A 児は「ふーん、羽が乾くと 飛ぶのか」と、納得したように見守る。その横で B 児もじっと蝶を見つめていた。

○神秘さへの感動

○情報としての図鑑の生かし方

○知識としては分かっているが、実物を見て確かめる

○本物への驚きと感動

○絵本や図鑑では知ることのできない五感を通した新たな発見

○興味・関心の持続へのエネルギー

(教師の関わり)

教師が羽化に合わせて飼育ケースを広い場所に移動したことで、幼児が友達と寄り合って観察したり、発見や感動を共感し合ったりすることが可能になった。環境を構成する際の教師に、「本物に触れさせたい」という願いがあったと考えられる。

教師の意図的な保育計画が必要であり、本事例のように、教師による呼びかけも大切である。また、科学絵本や図鑑等は、幼児の興味関心に即して提示すると効果的であり、状況や幼児の行動を予測して環境に入れ込む必要がある。

(考察)

蝶の羽化に立ち会った者にとって、その姿は神秘的で正に命を感じる瞬間である。

B 児は図鑑等で知識として卵から蝶の成長過程を知っていたが、初めて本物に触れ、事実に驚き引き込まれ、感動を味わっている。そこには絵本や図鑑では知ることのできない五感を通した学びがある。幼児が長い時間蝶を観察している姿から、本物には、興味・関心を持続させるエネルギーがあると考えられる。

●事例④ 4歳児 どんぐりで遊ぶ

10月初旬、A児B児C児が、通園路の途中、たくさんのだんぐり（シラカシの実・コナラの実等）を拾って幼稚園に登園して来た。大きなどんぐりや小さなどんぐり、なかには、まだ緑色のものや殻斗を付けているものもある。

3人は、「見て！このどんぐり 子供だよ 大人になると黒くなるんだよ。ツルツルして気持ちいいよ かわいいね」等と話しながら、自分が拾い集めたどんぐりを見せ合っている。

（教師がマジック、楊枝、空き容器等を用意する。）

A児は、「顔描きたい！」と言い、マジックで顔を描き、「大きい、小さい」と言う。書き終えると、2人に見せる。

B児は、「コマができるよ！」と、楊枝にどんぐりを刺しコマを作る。そして、作ったものを一列に並べて「1. 2. 3. 4. 5. 6…6個も作った！」と満足そうに言う。

C児は、アイスクリームの空き容器にどんぐりを入れて音の出る楽器を作った。上下に振って「いい音！」とA児やB児に聞かせる。「ほんとだ！」と言って応じるA児とB児。3人とも笑顔で楽しそうである。

<行動の分析>

○感動、共感、興味、関心

○経験の再現

○大きさの認識

○工夫

○経験の再現

○数量に親しむ

○経験の再現

○工夫

○数量感覚

○共感

（教師の関わり）

3人は、どんぐりに愛着を感じ、遊びの素材として取り入れ、工夫して製作に取り組んでいる。その中で、質感や大きさの違い、数について、「ツルツルする、可愛い、いい音」等と感じたことを言葉にして、どんぐりへの関心を高めている。教師は、幼児が十分に遊びを楽しめるよう、じっくりと取り組める場の確保や、遊びの展開を予測した物の補充等を行っている。時に、自然物との関わりが少ない幼児が、どんぐりと出会う遠足を計画したり、どんぐりを使用した遊びを提示することも必要になる。

（考察）

どんぐりは大人になったら黒くなると話していることから、先行経験を覚えており、製作にも自信をもって取り組んでいると思われる。友達に見せるなど、作った物への満足感や伝え合う喜びが感じられる。どんぐりを五感で捉えて楽しみながら、B児はどんぐりを数え、基数の原則に気付いている。数の概念の獲得も、このような素朴な

体験のなかで芽生えるものと読み取れる。

●事例⑤ 5歳児 どんぐり製作

A 児は気に入った形のどんぐりを選び出し、せんまい通しで穴を開け、竹ひごを通すと、木琴のバチにして板を叩いた。

B 児と C 児が真似をしてバチを作り合奏になる。「コンって音がする」「こっちは響くよ」と言いながらリズムを合わせ楽しんでいる。

翌日 B 児は竹ひごの両端にどんぐりを通し、やじろべえを作り始めた。中心を指でいろいろ試しているが真ん中にならず苦戦する。

すると横にいた A 児が「こうやるといいんだよ」と言って、片方だけどんぐりがついた 2 本の竹ひごをセロテープでつなげる。「先生見て、ぶつからないよ」と言う A 児に、教師が「よくできたね、揺れてるね」と言葉を掛ける。

次に A 児は、4 本の竹ひごをセロテープで止め、上に竹ひごをつなげてモビールを作った。 B 児も A 児と同じモビールを作る。

E 児と F 児は紙をどんぐりに貼り付けて人形を作っている。教師が、どんぐりに棒を通してから首にしている C 児の人形作りの方法を紹介すると、「そのやり方がいいね」と言い、E 児と F 児も立体人形を作った。その後、男、女、刀、椅子など人形遊びに必要なものを次々に作る。

<行動の分析>

- 知的好奇心が旺盛
- 道具の使い方に慣れている
- 友達に刺激を受け模倣
- 気付き・発見の喜び・共感

- 知っていることを人に知らせたい

- 試す・確かめ

- いろいろなイメージしている

- 試す

- 他者の考えのよさに気付く・取り込む・確かめる

(教師の関わり)

教師は、幼児が考えたり工夫したりしている姿を認め、成就感を持たせたり、相互に触発し合い、友達の考えにも意識が向くように紹介している。

(考察)

先行経験があり、どんぐりや道具の扱いがスムーズで、イメージを実現する満足感を味わっている。また、自分の考えや発見を友達に知らせる喜んだり、友達のアイデアを取り入れたりして楽しんでいる。

Ⅳ. まとめ

○知的好奇心から探求心、思考力に向かうためには、直接体験が必要である

事例からは、図鑑等の間接体験よりも本物の自然に触れる直接体験の方が、幼児の知的好奇心を揺さぶることが認められた。幼児は本物の自然に触れたとき、不思議だ、面白い、きれい等、様々な感情体験をする。そのものについて様々なイメージを想起して関わり、感動したりしながら疑問をもつ。そしてその疑問について確かめようと更に関わり、新たな発見を喜んだりする。このように、自然環境との関わりは、幼児の好奇心や探求心、思考力を育てていく。

しかし幼児は、面白そうな自然があっても興味を示さず、見過ごしてしまうことがある。そんな時、幼児が自然に対して意識を向けるきっかけとなるのは、教師の言葉や自然と触れ合う姿である場合が多い。教師自身の感性の豊かさが求められる所以である。

○じっくりと関われる場と十分な時間が好奇心や探求心を深める

幼児は好奇心を抱くと、対象をじっくり見たり繰り返し関わったりしている。継続して関わる中で、疑問に感じたり、新たな発見をしたりしている。それは、そのものの性質への気づきであり、小学校以降の学びの基になる。従って幼児が探求を深めるためには、落ち着いてじっくりと関われる場と十分な時間に配慮する必要がある。

○自然との関わりから探求心や思考力を深めるためには計画性が必要である

事例の幼児は皆、身近な自然物と関わっている。幼児にとって身近さとは、繰り返し関われるものであり、関わりのきっかけとなる。季節やタイミングを逃すと体験できない自然との関わりがある一方で、柑橘系の植物があれば蝶が産卵に来るなど、環境を整えておくことが豊かな体験につながることもある。従って教師は、自然環境に関わって展開する幼児の活動を予測し、環境が身近なものになるように環境を構成しなければならない。教師の見通す力、計画性が重要である。

○教師の承認や共感が幼児の探求を深めさせる

幼児は豊かな感性で感じ、考えたことを教師等に伝え、教師に受け止められると自信をもち、探究を深めていく。そのため教師は、幼児の発想を受け止め、共感したり、一緒に考えたりしながら、主体的な学びが深まるよう援助することが大切である。

○幼児同士の関係が、考える力を引き出す

それぞれの事例では、友達関係の育ちに発達の違いはあるが、友達の存在が幼児の

好奇心や探求心を深めるうえで重要な役割を果たしている。自分の思ったことを自由に表現できること、友達の考えを聞くこと、多様な考え方に触れ、それを自分の中に取り入れていくこと、友達と考えを出し合うことは、幼児が探究心や思考力の芽生えを培ううえで重要な経験となる。教師の役割は、幼児が感じたことを思い思いに発信できる雰囲気や、互いの考えを認め合える学級づくりに努めることである。

V. 自然との関わりを中心にした年間指導計画

3 歳	1 期(4 月～5 月中旬)	2 期(5 月中旬～7 月)	3 期(9 月～10 月中旬)	4 期 (10 月中旬～12 月)	5 期 (1 月～3 月)
ねらい	○幼稚園や先生に親しみを持ち、喜んで登園する。 ○幼稚園での過ごし方を知る。	○自分の遊びたい遊びを見つけて遊ぶ。 ○いろいろな遊具や素材に気付き触れて遊ぶ。 ○遊びに必要な簡単なきまりや約束を知る。	○自分の好きな遊びを見つけて先生や友達と触れ合って遊ぼうとする。 ○先生や友達と同じ遊びを楽しむ。んだり、同じ場で遊んだりする。	○新しい遊びや、皆と一緒にする遊びに興味・関心をもち、自分なりに遊ぼうとする。 ○先生や友達と一緒に場で自分の好きな遊びを楽しむ。	○自分の好きな遊びを見つけ、自分なりの方法で十分楽しむ。 ○皆と一緒にいろいろなことをして遊ぶ楽しさを味わう。 ○自分のことは自分でしようとする。
内 容	○幼稚園で飼っている小動物を見たり、触ったり、餌をやったりして親しみをもつ。	○砂や水等の遊びに興味をもって関わり、感触を楽しむ。	○砂や水等の遊びに興味をもって関わり、感触を楽しむ。 ○草花、木の実等の自然物や身近な小動物に、自分から関わって遊ぼうとする。	○見立てたり、何かのつもりになって、自分なりの遊びを楽しむ。	○冬の自然を体で感じとる。 ・吐く息の白さ ・手や戸外にある物の冷たさ ・日差しの温かさ ・雪や水の冷たさ 等
動物との関わり	園内の小動物を見る (ニワトリ、ウサギ、アヒル、小鳥等)	教師や年長児の小動物の世話を見る	先生と一緒に餌をやったり触ったりする	動物園の動物を見たり小動物と遊ぶ	
	身近にいる虫を見たり、探したりする (オタマジャクシ、メダカ、カタツムリ、ザリガニ、アリ 等)		年長児が世話をしているアヒルを追いかけたり触ったりして遊ぶ		
植物との関わり	園庭の花を見る (チーリップ、オジギソウ) (アサガオ、オシロイバナ)	色が出る草花で遊ぶ	木の実や草花で遊ぶ (ツユクサ、ネコジャラシ、ドングリ)	枯草や落ち葉の中で遊ぶ	
	栽培物に水をやったり、成長を見る (ミニトマト、インゲン)		栽培物の成長を見る (ハツカダイコン)		
	草の上で遊ぶ	年長児の育てた野菜で調理したものを食べる (ジャガイモ、キュウリ、ナス、インゲン)	芋ほりをする (さつま芋)	水栽培を見る (ヒヤシンス)	花を見たり、匂いを嗅いだりする
その他	・砂や水で遊び、感触を楽しむ ・シャボン玉の飛ぶ様子を見る			水が冷たくなり、水遊びができないことを感じる	
遠 足	新宿御苑	四ツ谷土手 葛西臨海公園	水元公園	井の頭公園 東郷公園	砧公園

4 歳	1 期(4 月～5 月中旬)	2 期(5 月中旬～7 月)	3 期(9 月～10 月中旬)	4 期 (10 月中旬～12 月)	5 期 (1 月～3 月)
ねらい	○新しい環境に慣れ、先生や友達と好きな遊びを見つけて遊ぶ。 ○幼稚園の基本的な生活の仕方が分かり、自分でしようとする。 ○幼稚園や先生に親しみをもち、喜んで登園する。 (新入園児)	○いろいろな遊びに興味や関心をもち、自分なりの取り組方で、遊びを楽しむ。 ○先生や友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。	○いろいろな遊びに興味や関心をもち、参加し、その中で自分の力を出して動かそうとする。 ○気の合った友達との関わりの中で、自分の思いや気持ちを表しながら遊ぶ。 ○体を力一杯動かしたり、リズムカルに動いたりする楽しさを味わう。	○いろいろな遊びを通して試したり考えたりしながら繰り返し遊ぶことを楽しむ。 ○気の合う友達と遊ぶ中で自分の気持ちを出したり、相手の気持ちを受け止めたりしながら遊びを進めていく。 ○皆で一緒にすることを喜び、楽しさを味わう。	○自分なりに目的をもち、考えたり、工夫したりして遊びを進めていく。 ○自分の考えを出したり、相手の気持ちに気付いたりしながら自分たちの遊びを楽しむ。 ○学級の皆ですることが分かって進んで取り組み繋がりを感じる。 ○年長組になることに期待をもち自分でできることは自分でする。
内容	○身近に咲いている草花や飼育している生き物に親しみをもち。 ○身近な動植物を見たり、餌を与えたりする。 ○土作り、種蒔きをして春の自然に親しみや関心をもち。	○季節の自然物に触れて遊ぶ。 ○水や砂に親しみ、自分なりの取り組みを楽しんだり、皆と一緒に楽しんだりする。	○身近な小動物や栽培物に親しみをもち、喜んで世話をする。 ○栽培物や自然物を取り入れて遊ぶ楽しさを味わう。	○身近な自然に目を向け、季節の変化を感じる。 ○植物の生長や変化に気付く。 ○収穫する喜びを味わう。 ○収穫した物で遊んだり、皆で料理をして味わったりする。	○年長児に動植物の世話や当番活動等の仕事を教えてもらい、年長組になることを楽しみにする。 ○冬の自然に興味をもち、自分なりに試したり、発見したりして驚きや喜びを感じる。
動物との関わり	先生や友達と小動物に餌を与えたり触ったりする 年長児のアヒルの世話を見る ツバメを見る (巣作り、雛、跳ぶ様子) 春に見られる虫や生き物を探す (オタマジャクシ、蛙、カタツムリ、メダカ) 身近な昆虫を探す、飼う (蟻、マルムシ、アゲハチョウ、青虫、カブト虫、ヒミ、螢、トンボ、ザリガニ)	年長児のアヒルの世話をしたり抱いたり、触ったりする 飼っている小動物の世話をしたり 年長児にアヒルの世話を教えてもらう 動物園の動物を見たり小動物と遊ぶ	秋の虫を見つけたり、泣き声を聞く (コオロギ、バッタ、鈴虫等) 冬眠する小動物を知る・冬眠中の水や枯葉を用意する (蟻、カタツムリ、蛙)	冬眠する小動物を知る・冬眠中の水や枯葉を用意する (カタツムリ、鈴虫、カブトムシ)	
植物との関わり	園庭の草花、樹木を見る (桜、ツツジ、チューリップ等) 草とり・土作り・種まき・水やり・草取り・成長を見る・収穫 (コマツナ、インゲン、ミトマ、イチゴ) 年長の野菜を見たり収穫物を食べる (トマト、キュウリ、ナス、インゲン、ラッカセイ、サツマイモ)	色が出る草花や実をとって遊ぶ (朝顔、おろい、椎の木) 実のなる木を見つけ、拾って遊ぶ (イチゴ、ドングリ、柿等) 冬の樹木を見る (梅、桃)	水やり、冬の支度を先生とする 発芽や成長の様子を見る 水栽培をする 根や葉を見る 花を見たり匂いを嗅ぐ (ヒヤシンス、クロッカス)	水栽培をする 根や葉を見る 花を見たり匂いを嗅ぐ (ヒヤシンス、クロッカス)	
その他	○鯉のぼりの動く様子を見る ○雨の日が多いことに気付く ○雨の降る様子や水溜りを見る ○シャボン玉の飛ぶ様子を見る	○いろいろな形の雲を見る ○水が冷たくなってきたことに気付く	○風が冷たくなり、寒くなってきたことを感じる	○霜や氷を見つけて遊ぶ ○雪の降る様子を見る	
遠 足	砧公園 新宿御苑	ジャガイモ掘り 葛西臨海公園	水元公園 芋ほり	井の頭公園 北の丸公園 国会前庭公園 砧公園	

5歳	1期(4月～5月中旬)	2期(5月中旬～7月)	3期(9月～10月中旬)	4期(10月中旬～12月)	5期(1月～3月)
ねらい	○年長児としての喜びや自覚をもち、生活や遊びに取り組む。 ○新しい環境に慣れ、気の合う友達と遊びを楽しむ。	○気の合う友達と目的をもち、考えを出し合って遊びを進めていく。 ○生活や遊びの中で自分なりの目的をもって工夫したり試したりする。	○友達と遊ぶ中で、互いに考えやイメージを受け入れ合って遊びを進める。 ○自分の力を発揮しながら、学級全体やグループの目的に向かって取り組む。	○グループで考えたり工夫したりして遊びを進める中で、個々の力を発揮する。 ○目的に向かって友達と力を合わせて取り組む楽しさや満足感を味わう。	○これまでの経験を生かし、十分に遊びを楽しむ。 ○互いの考えや気持ちを受け入れ認め合いながら、気持ちやイメージのつながりを楽しむ。 ○友達と協力して活動に取り組みやり遂げた充実感を味わう。
内容	○春の自然や動植物の様子に気付き関心をもって関わる。 ○素材の感触を味わい、自分のイメージしたものを作る。	○動植物の成長や様子に関心をもち世話をする。 ○自分なりの目的に向かって、考えたり工夫したり試したりして取り組み、満足感を味わう。	○季節感を感じ取り、自然や生活への理解を深める。 ○身近な機器や用具の扱い方に慣れ、自分で選んで使う。 ○草や木の実を拾ったり、集めた物を遊びに取り入れれたりしながら、秋の自然に親しむ。 ○成長を楽しみに、秋植えの栽培物を育てる。 ○空や雲、風などに関心をもつ。	○冬の自然現象に興味・関心をもち、遊びの中に取り入れる。	
動物との関わり	○アヒルの世話をする 抱く・可愛がる ○餌の切り方混ぜ方に留意し適量にする ○動きや羽毛の変化に気付く	○アヒルの世話をしながら アヒルと遊ぶ	○友達と世話をしながら ○当番の仕事に責任をもって取り組む ○当番の仕事年少児に教える	○カワサミヤカメを冬眠させる 冬眠から覚めたカメや蛙を見る	○動物園の動物を見る
植物との関わり	○園庭の草花を見る 仔杓の芽 ハズキ 柿の花 梅の実 ○発芽・成長を見る 葉の成長・野菜の変化 ○雑草を抜く 土作り 種蒔き・田植え 皆で食べる (ナス、トマト、キュウリ) 小鳥やウサギの餌にする 繰り返し育てる (小松菜、ワカメイコン 他) ○イチゴを見る 収穫する	○梅の実 ○桃の実 ○柿の実、栗の実等を見る ○梅・桃・桜の花を見る	○種取り・土作り 秋植えの種蒔き・球根植え さつま芋掘りビーナツ収穫・食べる 球根を日向に置き成長を見る ○水栽培 (ヒヤシス、クワカス) 根・花の成長を見る 匂いを嗅ぐ ○イチゴの苗床	○カワサミヤカメを冬眠させる 冬眠から覚めたカメや蛙を見る	○動物園の動物を見る
その他	○空箱等で工夫して作る 船や水車等水遊びに必要な物を身近な素材で作る (空箱、砂、泥粘土) (木片、プラスチック容器、釘) ○気持ちよい暖かさを感じる ○雨の降る日が多いことに気付く	○いろいろな雲の形を見る	○水が冷たくなってきたことを感じる ○風の冷たさ、雪の降る様子を見る	○自然物を使って遊ぶ 冬物の自然物を遊びに取り入れる	
遠足	砧公園 小石川植物園 新宿御苑	ジャガイモ掘り 葛西臨海公園	水元公園	芋ほり 国会前庭公園 井の頭公園 北の丸公園 国会前庭公園 砧公園	

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2016) 「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/08/03/1375316_3_1_1.pdf
- 2) 文部科学省「幼稚園教育要領」 2017
- 3) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」 2008
- 4) 無藤隆「幼児教育の新しい姿から小学校の接続を見直す」『幼児教育じほう』5月号 2017：4-11
- 5) 小泉英明・秋田喜代美・山田敏之「幼児期に育つ科学する心」 2007
- 6) 森上史郎・柏女靈峰「保育用語辞典」ミネルヴァ書房 2007
- 7) 森林監修・清水凡生・山崎晃・井上勝・鳥光美結子・深田昭三・河野利律子・中島紀子・西田忠男・青井倫子「ちょっと変わった幼児学用語集」北大路書房 2002

Method of Teaching of the “Environment”

Child’s Curiosity and Inquiring Mind Grow up through Relation with Natural Environment

Yoko KOYAMA

Recordings of children playing in a natural environment were collected by natural observation and analyzed to investigate what young children learn and how their teachers guide them in the process. As a result, in firsthand experiences that stemmed from inquisitiveness, children shared their wonder and discoveries with their teachers and friends, or incorporated a friend’s ideas to further explore and deepen their thinking. Educators need to not only aid children in empathizing and becoming motivated, but also to guide them with clear goals. Items extracted from the recordings were then summarized into an annual plan, illustrating how best to create settings for encounters and interactions with nature.